

黄春明作品の日本語訳における社会的意義

明田川 聡士

一、戦後日本における「台湾文学」翻訳略史

昨今の日本では、台湾への関心の高まりから台湾関連の書籍が毎年一〇〇冊以上も刊行されており、台湾文学の翻訳作品が占める比重も小さくない^①。ただ、こうした活気のある状況は長いあいだ安定的に続いてきたものではなかった。戦後の日本で台湾文学に注目が集まったのは一九七〇年代末からであり、それまで台湾の文学状況が日本に紹介されることは寥々たるものであった。文学という領域に限らず、歴史や社会の分野でも台湾関連の書籍が限りなく少ないという点は、戦後三十年余の日本社会では広く普遍的な状況でもあった。当時の様子について魯迅文学の翻訳者にして中国現代文学研究者としても著名な竹内好（一九一〇―七七）は、次のように記していた。

神田に行くと、中国書の専門店が何軒かある。ちかごろとんと蒐書熱がおとろえたが、それでも年に何回かは足を運ぶ。いわゆる唐本だけあつかう店もあるし、新本だけをあつかう店もあるし、新旧兼備の店もある。新本にも、大陸本、香港本、台湾本と種類があつて、店によって比重がちがう。「中略」私はもつと台湾のことを知りたい。台湾社会の実態について知りたい。神田の街を歩くたびにそれを感じる。不思議なことに、こうした知的要求を満たす本なり論文なりが、ほとんど目につかない。むしろ、台湾政府の日本語による弘

報活動はあるし、独立派の雑誌も、一時よりは衰えたけれども、まだ出ている。しかしそれらは、政治的主張を盛っているだけで、台湾社会の底の動きを伝えてはいない。²⁾

竹内は、当時の日本社会では中華人民共和国の状況を論じる書籍が多く出ていたのに対して、それに比べて台湾社会の庶民の動きを伝える書籍は極めて少なかったと指摘していた。一方、台湾史研究者の戴國輝（一九三一—二〇〇一）によれば、こうした状況を生み出した要因のひとつには、台湾研究を政治的なタブーと見なし、台湾について論じる者を台湾ロビースト視する特殊な日本の雰囲気が存在したからだという。³⁾ こうした当時の背景には日本人の台湾認識に対する屈折した眼差しが認められる。戦後の日本では、中国への侵略戦争に対する内省的批判、そして限定的な情報だけを頼りに進んでいく新中国建国や社会主義革命に対する一方的な関心と期待から、戦後日本の知識人たちの多くが中国研究に向かっていき、台湾の歴史・政治・社会・人文学への関心の低さは目立っていた。そうした社会の様子は、当時の台湾文学の翻訳や紹介に対しても影響が見られた。一九四五年から六〇年代末にかけて、日本では邱永漢の日本語小説『濁水溪』（一九五四）、『密入国者の手記』（一九五六）、『香港』（一九五六）、『刺竹』（一九五八）、『惜別亭』（一九五八）、呉濁流の日本語小説『アジアの孤児』（一九五六）、『歪められた島』（一九五七、『アジアの孤児』を改題した著作）などの数冊が刊行されていた限りであった。⁴⁾

もともと一九七二年九月には、戦後日台関係の一大局面である日華断交と日中国交正常化がなされたこともあり、日本社会での台湾に対する関心も出始めてきた。その年には、呉濁流『夜明け前の台湾——植民地からの告発』（一九七二）、『泥濘に生きる——苦悩する台湾の民』（一九七二）が刊行された。⁵⁾ ただ、一九七〇年代には王育徳『台湾——苦悶するその歴史』（一九七〇）や史明『台湾人四百年史——秘められた植民地解放の一断面』

(一九七四)の増補改訂版に代表されるように、台湾人自身が台湾の歴史を物語る書籍が好まれる傾向を見せ始めたが、⁶⁾とはいえ、台湾人の文芸創作の翻訳や紹介が依然として少なかつた事実に変わりなかつた。現代詩の領域では中華民国「笠」編集委員会編『華麗島詩集——中華民國現代詩選』(桓夫「陳千武の筆名のひとつ」、商禽、余光中、痲弦、洛夫、林亨泰、李魁賢、非馬、林宗源、林煥彰、杜国清、紀弦、鄭炯明、陳明台、杜芳格、周夢蝶、趙天儀、鄭愁予など六〇名あまりの詩を収録、一九七〇)や北原政吉編『台湾現代詩集』(陳明台、鄭炯明、李敏勇、杜国清、許達然、陳千武、林亨泰、李魁賢、非馬など三〇名あまりの詩を収録、一九七九)などの詩集がいくつか刊行されていたが、⁷⁾小説に限っては、張文環が自ら日本語で創作した『地に這うもの』(一九七五)が出版された以外に、陳紀滢『荻村の人びと——動乱中国の渦巻』(一九七四)や陳若曦『北京のひとり者』(尹県長)「北京のひとり者」などを収録、一九七九)などが刊行されたに過ぎなかつたのである。⁸⁾陳紀滢や陳若曦作品の翻訳出版は、戦後台湾で刊行された台湾人作家による創作であつたとはいえ、その物語内容は抗日戦争期や文化大革命下での中国大陆を舞台とするものであり、台湾に生きる人々の日常を描き出した作品とは言えなかつた。

そうした中で現れたのが、黄春明(一九三五—)の『さよなら・再見』^{ツァイチェン}(「さよなら・再見」「りんごの味」「海を見つめる日」を収録、一九七九)だつたのである。⁹⁾同書は刊行直後から一九八〇年代にかけてたびたび増刷され、当時のベストセラーとなつた。この未曾有の大ヒットにより、日本の読者にとつても台湾社会の様相を描き出す戦後台湾文学は大きな関心の的となつていったのである。やがて一九八〇年代には「台湾現代小説選」シリーズの刊行も始まり、『彩鳳の夢——台湾現代小説選Ⅰ』(一九八四)、『終戦の賠償——台湾現代小説選Ⅱ』(一九八四)、『三本足の馬——台湾現代小説選Ⅲ』(一九八五)、『鳥になつた男——台湾現代小説選Ⅳ』(一九九八)など、本省人作家を中心とする台湾文学の翻訳シリーズが出版されていった。¹⁰⁾それらは同時代の現

代社会に生きる台湾人が自らの歩んできた歴史や社会に対して何を考えているのか知りたいという日本の読者の要望に応えるものでもあった。そうした流れの先に、一九九〇年代初めには白先勇『最後の貴族』（一九九〇）、劉大任『デイゴ燃ゆ——台湾現代小説選別巻』（一九九二）、三毛『サハラ物語』（一九九二）など、台湾を離れて欧米で創作活動を展開する作家たちの作品も単行本として刊行されていくようになったのである。⁽¹⁾

このほか、一九八〇年代から九〇年代にかけては日本で台湾映画の上映や紹介が盛んに行われ、映画という切り口から台湾文学への関心や批評が広がったことも無視できなかった。右に述べた黄春明『さよなら・再見』に収録された短編小説「さよなら・再見」「りんごの味」「海を見つめる日」は当時日本で上映されていた台湾ニューシネマの原作であり、また朱天文『安安の夏休み』（一九九二）、『世紀末の華やき』（一九九七）も侯孝賢監督が翻案した小説として注目された。⁽²⁾ こうして一九九〇年代に至ると、日本における台湾文学の翻訳者にも変化が現れた。この頃には、中国現代文学研究者が台湾文学に関心を持ち、作品の翻訳や紹介に注力し始めたのである。山口守監修『バナナポート——台湾文学への招待』（一九九一）、藤井省三編『笑いの共和国——中国ユーモア文学傑作選』（一九九二）、藤井省三編『現代中国短編集』（一九九八）などでは中国現代文学と平行して台湾文学の翻訳が盛んに行われ、台湾文学や台湾文学史の紹介と解説に関しては、より深く学術性に富む内容へと変化していった。⁽³⁾

一方、二〇〇〇年代前後には台湾文学の翻訳や紹介においても、今までにはない新たな試みが見られるようになった。この頃には翻訳を通して、台湾の原住民作家や詩人への関心が深まったのである。もともと一九九〇年代初めには、呉錦発編『悲情の山地——台湾原住民小説選』（一九九二）が刊行されていたが、同書は鍾理和や鍾肇政、李喬など非原住民作家が山地社会を描いた作品が中心であった。⁽⁴⁾ こうした原住民作家が暮らす生活空間への関心の高まりは、二〇〇〇年代以降には原住民作家自身が描き出した作品の翻訳へと結びついていく。

二〇〇〇年代には「台湾原住民文学選」シリーズの刊行も始まり、パイワン族の盲目詩人であるモーナノンやブスン族のトバス・タナピマによる作品二十数編を収録した下村作次郎編訳『名前を返せ——モーナノン／トバス・タナピマ集』(二〇〇二)¹⁵が刊行された。その後も、パイワン族の女性作家リカラツ・アウー、離島の蘭嶼島で暮らす海洋民族タオ族のシャマン・ラポガン、タイヤル族のワリス・ノカン、アミ族で政治家としても著名な孫大川、台南を中心とする平埔族であるシラヤ族の楊南郡、ルカイ族のアオヴィニ・カドウスガヌ、プユマ族の女性詩人董恕明などシリーズ全体で三三名の原住民による小説や詩、評論が翻訳され、二〇〇九年に至るまで全九巻が刊行された。¹⁶これらの刊行は、日本の読者が台湾文学作品を受容していく中でも原住民というエスニシテイの問題を明確に打ち出すものであり、画期的な出版企画であったと言える。原住民の文学作品をめぐる翻訳と紹介はその後も集中し、巴代『タマラカウ物語』(二〇一二)¹⁷を始め、シャマン・ラポガン『冷海深情——シャマン・ラポガンの海洋文学1』(二〇一四)、『空の目——シャマン・ラポガンの海洋文学2』(二〇一四)、『大海に生きる夢』(二〇一七)¹⁸も話題となり、日本の読書界では肯定的に評価された。

ほかに、この時期に注目されるのは、女性作家の作品翻訳が多く出現したことでもある。とりわけ李昂は台湾における代表的な女性作家として、新聞や雑誌の書評欄でも何度も紹介された。李昂『夫殺し』(一九九三)は、日本社会で一九九〇年代初頭に盛り上がった女性の社会参画を求める期待に沿うかのように、台湾フェミニズム文学の代表作として評価されていたのである。同作は二〇〇〇年までに六〇〇〇部余り刊行されたとも言われ、日本における台湾文学翻訳作品としては、黄春明『さよなら・再見』に次ぐベストセラーとなった。²⁰この後も李昂の作品では『迷いの園』(一九九九)、『自伝の小説』(二〇〇四)、『海峡を渡る幽霊——李昂短篇集』(二〇一八)、『眠れる美男』(二〇二〇)²¹などの単行本が続々と刊行された。

こうして日本では二〇〇〇年代以降、社会的にも「台湾文学」という呼称が定着していったが、その時代にお

いて「新しい台湾の文学」シリーズ全一二巻の刊行は非常に重要な意義を持っていた。都市、ジェンダー、ポストコロニアリズムなどの各領域から、台湾社会の様相や人々の生き方への理解と関心を強く促したのである。都市と文学をテーマに掲げた『台北ストーリー』（一九九九）、台湾の郷土文学を再評価した『鹿港からきた男』（二〇〇二）、台湾客家文学に初めて焦点を当てた『客家の女たち』（二〇〇二）など複数の作家による代表作を収録した日本版短編小説集から、朱天心『古都』（二〇〇〇）、施叔青『ヴァクトリア倶楽部』（二〇〇二）、李喬『寒夜』（二〇〇五）、白先勇『孽子』（二〇〇六）、『台北人』（二〇〇八）、朱天文『荒人手記』（二〇〇六）、張系国『星雲組曲』（二〇〇七）など単行本も刊行された。前述した李昂『迷いの園』や『自伝の小説』も同シリーズで刊行された一作であった。これらの作品は、日本の読者に同時代の台湾文学作品が内包する多元性と台湾社会が持つ活力を立体的に伝えたのであった。

このように日本で翻訳紹介される台湾文学作品は多様化し、二〇〇〇年代後半には「台湾セクシユアル・マイノリティ文学」シリーズとして、邱妙津『ある鰐の手記』（二〇〇八）、紀大偉『膜』（二〇〇八）、許佑生や呉継文、阮慶岳、曹麗娟、陳雪などの作品を収録した『新郎新夫』（二〇〇九）も刊行された。²⁴ LGBTQの問題を主題に取り込んだ台湾文学作品は、その後も日本の読書界で高い評価を呼び、陳雪『橋の上の子ども』（二〇一〇）、洪凌『フーガー——黒い太陽』（二〇一三）、徐嘉沢『次の夜明けに』（二〇二〇）、李屏瑤『向日性植物』（二〇二二）など多くの作品が刊行されていった。²⁵ また、同時期には「台湾熱帯文学シリーズ」として、李永平『吉陵鎮ものがたり』（二〇一〇）や張貴興『象の群れ』（二〇一〇）、黄錦樹『夢と豚と黎明』（二〇一一）、さらには黎紫書や賀淑芳などの作品を収録した『白蟻の夢魔』（二〇一一）も刊行された。²⁶ これらは台湾馬華文学のシリーズとして翻訳され、その中にはマレーシアで創作を続ける華人作家も含む。台湾文学が中国や日本との関係性だけで語られるのではなく、南洋との繋がりからも解釈されていく点は、日本の読書界でも着実に受け

入れられていった。そうした近代的な国家の概念に縛られない中国語圏文学の姿は、近年ではサイノフォン(Sinophone)という視角でもって学術界を中心に注目され、王徳威ほか編『華語文学の新しい風』(二〇二二)として紹介されている。⁽²⁷⁾

サイノフォンの刺激は、逆に台湾郷土文学の代表作についてあらためて注目し、翻訳や紹介によって再評価することにも繋がった。二〇一〇年代には「台湾郷土文学選集」シリーズの刊行が進み、鍾肇政『永遠のルピナス』(二〇一四)、『怒濤』(二〇一四)、鍾理和『たばこ小屋・故郷』(二〇一四)、葉石濤『シラヤ族の末裔・潘銀花』(二〇一四)、李喬『曠野にひとり』(二〇一四)が刊行された。⁽²⁸⁾また、これとは別に「客家文学的珠玉」シリーズの刊行も行われ、李喬『藍彩霞の春』(二〇一八)、鍾肇政『ゲート激情の書』(二〇一八)が刊行されたほか、曾貴海や利玉芳の詩集も同シリーズ中で翻訳され、客家人作家・詩人に対して再び関心が寄せられていた。⁽²⁹⁾またその一方で、蔡素芬『明月——クリスタルムーン』(二〇一四)や『オリーブの樹』(二〇一六)など、従来の翻訳シリーズの選出から漏れた台湾文学の代表的作品の翻訳紹介が行われると同時に、呉明益や甘耀明、郭強生、黃崇凱、陳思宏、楊双子など次世代の作家による創作の翻訳も盛んに行われ、同時代の台湾文学が反映する現代台湾人の歴史観や価値観などへの理解もさらに進んでいったのである。⁽³¹⁾

以上、日本では戦後の台湾文学作品がいかなる経緯で翻訳出版され、現在までにどのような作品が刊行されてきたのかを概観してきた。日本語訳の出版にあたり原作が選出されるその理由は、同時代の日本社会や学術界の様相と無縁ではない。一九七〇年代末に日本語へと翻訳された黄春明作品は、日本で翻訳紹介された台湾文学作品の先駆的位置づけにあったが、その経緯の背後に見え隠れする社会的背景との関係は熟考するに値する。黄春明作品の多くは、高齢者や貧困者、女性、子供などを登場させ、主人公が社会の困難や不正に直面する様子を描いていくものである。黄春明作品が抱える社会性についての先行研究は、台湾では少なくなき、これまでにもす

でに陳惠齡、黄英哲、蘇碩斌、王梅香、李有成、陳正芳、施又文、陳永松などが、虚構としての物語と現実の台湾社会との関係について分析してきた。⁽³³⁾一方、日本では黄春明作品の翻訳が複数冊刊行されているにもかかわらず、先行研究では西端彩などが『さよなら・再見』の翻訳背景について論じた限りであり、依然として考察の余地を残している。⁽³⁴⁾本稿では、黄春明作品の日本語訳に焦点を当て、邦訳された背景やその後の反響について探り、翻訳作品が抱える社会的意義について考察したい。

二、短編小説集『さよなら・再見』の刊行が持つ社会的意義

黄春明の作品が日本で最初に翻訳されたのは一九七〇年代であった。一九七五年一二月に本橋春光編訳『現代中国短篇小説選』が刊行されたが、⁽³⁴⁾その中で魯迅、師陀、姚雪垠、劉以鬯、七等生、王文興の短篇小説とともに黄春明「子供の大きな玩具」というタイトルが見られる。⁽³⁵⁾「現代中国短篇小説選」という書名ではあるが、同書所収の七作家八作品のうち、半数が台湾や香港の作家である。訳者後記にて、編訳にあたり「現代中国文学界から優れた純文学作品」（傍点原文ママ）を訳し出したと記しているように、一九六〇年代初頭より台湾文学界で活動を始めた黄春明の作品が、早くも一九七〇年代の日本で魯迅「孔乙己」や「藤野先生」と並ぶ現代中国の純文学作家として評価、紹介されていた点は興味深い。しかしながら、筆者の調査では日本国内で本書を所蔵している図書館は非常に少なく、当時その流通は極めて限定的であったものと思われる、本橋春光による翻訳が日本社会に何らかの影響を与えるに至ったとは言いがたい。⁽³⁶⁾

実際のところ、日本において実質的に黄春明作品が最初に翻訳され、日本の読者に影響を与えたのは一九七九年九月に出版された田中宏と福田桂二の訳による『さよなら・再見』であった。⁽³⁷⁾同書には「さよなら・再見」

「りんごの味」「海を見つめる日」の順で三作が収録され、翻訳者は前二作が福田、後一作が田中である。⁽³⁸⁾ そのうち「さよなら・再見」は『世論時報』（一九七七年九月号〜一九七八年三月号）に半年間連載された内容を改稿し、同書に収めたものであった。⁽³⁹⁾ 翻訳の底本には台湾ですでに出版されていた『莎啞娜啦・再見』が使われているが、⁽⁴⁰⁾ 原作に所収された「青番公的故事」は翻訳の際に除かれた。⁽⁴¹⁾ この日本語訳『さよなら・再見』の出版は、当時創業したばかりの東南アジア関係の出版物を中心に取り扱う小規模出版社によるものであったが、刊行部数一万部を超えるベストセラーとなった。⁽⁴²⁾ その奥付を見ると、初版発売から二ヶ月後の一九七九年一月一日には第二刷が、同月三〇日には第三刷が出版され、七年後の一九八六年までに第七刷が刊行されており、一九七〇年代末から八〇年代半ばにかけての日本社会でいかに注目されていたのかを知るひとつの指標となる。⁽⁴³⁾

『さよなら・再見』のあとがきでは、共訳者の田中宏が「現代の台湾を描いた小説が日本で翻訳されるのは、どうやら初めてのものである」と記している。⁽⁴⁴⁾ 前節で述べたように、戦後日本で台湾の作家による小説では、この時までに呉濁流や張文環、陳若曦、陳紀滢などの作品が刊行されていたが、呉濁流や張文環の作品は日本語による原文の作品であり、陳紀滢と陳若曦の作品に至っては抗日戦争や文化大革命など中国を舞台とする物語展開であった。台湾を舞台にして台湾人を描き出す作品で、外国文学として日本の読書市場に今回った書籍は『さよなら・再見』が確かに最初だったのである。

ただし、注意すべきは当時日本で『さよなら・再見』が話題となったのは、戦後初めて翻訳刊行された台湾の小説であったという点だけが強調されたわけではなかったということだ。むしろ、それよりも大きな理由となつたのは同書の書名にも掲げられ、巻頭作品としても掲載されている「さよなら・再見」の物語性が、日本の読者の心に強く反響したという点にあった。同作は一九七二年の台湾を舞台に、黄という名の青年が勤務先の上司の指示で、日本人団体客の買春観光に同行する物語である。黄は日本人のために買春の仲介役を任されているので

はないかという慚愧心と厚顔無恥に振る舞う日本人を懲らしめたいという義侠心のあいだで気持ち揺れながら、台湾北東部に位置する宜蘭県礁溪の温泉街までやってくる。やがて、途中の通過駅であった宜蘭県頭城から車内で居合わせた男子大学生と日本人団体客のあいだでの会話を通訳していくことで、先の戦争の歴史を都合よく忘れていまだに植民地意識が抜けない日本人男性と、外国ばかりに羨望の眼差しを向ける台湾人青年の双方をたしなめていく。

田中宏は『さよなら・再見』のあとがきで紙幅の多くを割いて同作について解説しているが、そこでは一九七七年に台湾を訪れた外国人観光客の中で最多であったのが日本人で、観光客全体の六割を占めていたことを指摘する。⁽⁴⁵⁾台湾で日本人男性旅行者によって繰り返される買春観光の実態に言及し、「作者は貧しい庶民たちに暖かい視線を送ると同時に、その背景にある社会および社会問題の洞察に強い関心を払っている」と作品が抱えるその社会性に大きな賛美を送るのであった。⁽⁴⁷⁾日本では一九六四年に海外への渡航自由化が実現し、一九七〇年代には海外旅行の完全自由化が進んだ。海外への渡航者数は一九七〇年の六六万三四六七人から一九八〇年の三九〇万九三三三人へと、一九七〇年代の十年間でおよそ六倍へと増加した。⁽⁴⁸⁾その一方で、当時東アジアや東南アジアでは日本人男性による集団買春が常態化し、国内外で社会問題にまで発展していた。⁽⁴⁹⁾台湾でも台北近郊の温泉街などを中心に日本人男性が繰り返す集団買春は、台湾の人々の矚感をひどく買うものであった。『朝日新聞』の報道によれば、台湾の旅行業者が日本の旅行業界向け専門誌に意見広告を二年間にわたって連載し、「恥」という字をご存じですか。あなたのサラリー、ボーナス、そして配当の一部が、女性の春をひさいだお金からしぱり出されている、という事実を目をつぶらないで下さい」と旅行業者の不徳さえも訴えるまでになっていたという。⁽⁵⁰⁾そうした同時代的に進行する社会問題から日本の読者は「さよなら・再見」やそれを巻頭に収録した『さよなら・再見』を読んでいたのである。同訳書が刊行された前後には、全国紙をはじめ地方紙や雑誌などでも書

評が多く掲載されていたことも、当時の反響の大きさを知る手がかりのひとつとなる。「決して深刻にはなく、軽過ぎるくらい軽妙に書かれた一編なのだが、それだけにむしろ面白いとは言い切れぬ苦い後味が残る」(『朝日新聞』)という書評に見られる「苦い後味」とは、日本の読者が感じたうしろめたさとやましさを十分に伝えるものである。

とはいえ、黄春明が作中で表現しようとした意図は、日本人男性による海外での買春観光そのものを糾弾することであつたのだろうか。当時、一部のメディアは「さよなら・再見」の作品内容の紹介に加えて、作家本人に対しても強い関心を寄せていた。たとえば、週刊誌『朝日ジャーナル』は、黄春明が一九八二年に来日した際にインタビューを実施していた。同誌では黄春明が来日インタビューの中で述べた、「買春観光は表面だけのこと、根はもつと深い。たとえば日本人の精神構造です。台湾にやってくる日本人の傍若無人な態度を見ると、日本は戦争に負けなかつたのではないかと思えてなりません。集団でやってきて、まるで自分の国にいるかのようになすうずうしい態度をみせる。「中略」台湾はいまでも、本質的には日本の植民地です。昔は軍事的に侵略されたけど、いまは経済力で支配されている。しかも、このほうがずっとたちが悪い」という発言が掲載されている。ここには買春観光の背後に潜む日本人による経済的な侵略と支配、暴力そのものを指弾しようとしていた姿勢が映る。また、黄春明自身は『さよなら・再見』の発売を紹介した「アジアの女たちの会」の会報誌『アジアと女性解放』にメッセージを寄せてもいたが、そこでは「戦前は軍事侵略、植民地収奪、戦後は経済侵略と変わらない日本人の姿をきわめて残念に思います。買春観光もかたちをかえた日本人のアジアへの侵略です」と記していた。このように日本の読者は『さよなら・再見』の翻訳を通して黄春明という作家を知り、戦後日本経済が發展する中でアジア、アフリカ、ラテンアメリカ等の開発途上国で繰り広げられる日本の経済的・文化的植民支配の現状に、あらためて視線を送つたのであつた。

日本社会における黄春明作品に対する反響は、その後も続いた。黄春明は一九八四年一月に神奈川県川崎市立労働会館で開催された第二回アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議への招聘を受けて来日し、四日間にわたって続いた国際会議では、「文化の支配と民衆の文化」というテーマのもとで、フィリピンやタイ、ケニア、エジプト、南アフリカ、チリ、パレスチナなど各地から集った作家やジャーナリスト、文芸評論家、映画監督、芸術家たちと意見を交わして交流した。⁽⁵⁵⁾ その様子を報道した『日本経済新聞』の記事によると、黄春明は公開シンポジウムで『さよなら・再見』の日本語訳にも触れ、物語では日本人による台湾での買春観光への非難だけを念頭にしたものではなく、その背景に広がる開発途上国での日本による文化的・経済的植民、搾取のありさまを指摘しようとしたと訴えていた。⁽⁵⁶⁾

台湾では一九五三年以降「さよなら・再見」が文芸誌『文季』で発表された一九七三年に至るまでのおよそ二十年間で、外国投資のうち日本からの投資件数は全体の二割を占め、その投資金額も一九七四年には三八九〇万ドルとなり、アメリカからの投資額に匹敵するほどにまで膨れ上がった。⁽⁵⁷⁾ さらに一九七四年の対日貿易赤字は一三億ドルにのぼり、台日経済の貿易不均衡は際立ち、深刻な国際問題となっていたのである。⁽⁵⁸⁾ こうした当時の国際関係を背景にして「さよなら・再見」を読み解くと、黄春明の批判の矛先が日本人観光客による台湾での買春観光そのものに向けられているのではなく、小説という虚構の物語展開を通じて、読者に戦前から戦後にかけての経済的・文化的植民と搾取が連鎖する関係を再考させようと呼びかけていたことがわかる。『さよなら・再見』日本語訳の自序においても、「最後に、日本の友人の皆さんに希望したいのは、第二次大戦までの日本の台湾に対する植民地統治の経緯と結果を忘れないでいただきたいということである。私の意図は、けつして昔のツケを清算することや日本を仇敵とみなすことにあるのではない。過去の歴史について充分に反省する日本の友人があるならば、経済大国にあつても開発途上にある私たちと互いに手をたずさえ、互いに尊厳を認め合

う仲になっていただきたい⁽³⁹⁾と述べている。このように黄春明は一貫して、自身の創作意図が日本人の買春観光を醜悪に描き出す点にあるのではないことを示していた。むしろ黄春明は日本人の買春観光を題材にとりながらも、戦後の日本と台湾のあいだで弥漫する経済的、文化的、さらにはジェンダーにも関わる問題の根源を、より表象的な手段でもって文字化させ、可視化させ、読者の視線を社会的、国際的な空間へと引き込んでいったと言えるのであった。

そうした黄春明の創作意図が最も端的に表れているのが、物語の結末に至り、主人公の黄が日本人観光客と台湾人学生のあいだで通訳をする展開であろう。ここでは日中戦争の歴史を持ち出しながら、次のように日本人を説き伏せていくのである。

「このくらいの年齢は、ちょっとロマンチックで、愛国心が割合と強烈なんです。私はもうこれ以上なにも質問しないようにいたしました。いろいろなことはすでに歴史の中のことです。みなさん、今回は、ただ遊びにこられたんですから、こういう昔の話をいろいろいっても、ただ興ざめするだけでしょ」私は一息いれた。「しかしこの青年は、日本人は武器は棄てたけれど、血を流さないで人を殺す経済侵略に手段を変えたというんです。私はそんなことはいえないと話しましたが、彼は経済侵略だというんです。ある面から見れば……」「黄さん、もういいよ、もういいよ」馬場はまた首を振りながらいった。佐々木がひどく悲しそうにいった。「黄さん、すみません」⁽⁴⁰⁾

物語の結末で、日本人の馬場と佐々木は台湾人青年の通訳によって咎められ、言い知れぬ居心地の悪さと羞恥を覚える。それは一九七〇年代の日本の読者が「さよなら・再見」の読書体験によって直感したであろう、戦時

中の近隣アジア諸国への軍事的侵略と戦後の経済的侵略の接続をめぐる罪悪感の投影でもあったと言える。

『さよなら・再見』の翻訳者の一人である田中宏は、同書出版当時は愛知県立大学外国語学部中国学科の教員として日本アジア関係論などを担当していた。また、その一方で恩給支給の対象外となる台湾人元日本兵たちの戦後補償を日本政府に強く求めていく「台湾人元日本兵の補償問題を考える会」の活動にも参加していた⁽⁴⁾。戦後の日本社会は時間の経過とともに戦争に対する内省的意識が徐々に希薄になり、それがもたらした分断と不合理に対して顧みることは少なくなっていた。田中は文学研究者ではないが、黄春明作品の翻訳紹介という手段を選択することで、あるいは台湾人元日本兵の補償問題を考える会の活動に関与していくことで、かつて日本の植民地であった台湾が置かれた現況を理解することから始まり、戦後社会の展開の中で自然と忘却されていく戦後補償や戦争責任の問題を考えるに至ったのであろう。それは黄春明作品の日本語訳がもたらした社会的意義の一面でもあったのである。

三、短編小説「戦士、乾杯！」に内包される原罪の意味

黄春明の『さよなら・再見』は一九七〇年代末に日本語訳が出版された際、その物語内容は当時の日本社会の関心と大きく呼応し読書界や学界で高い評価を得て、戦後日本で訳出されたアジア文学の中でも最も話題を呼んだ作品のひとつとして称されるようになった⁽⁵⁾。しかしながらその勢いは続かず、次に日本で翻訳作品が刊行されたのは一九九一年九月に山口守監修『バナナポート——台湾文学への招待』で、黄春明の短編小説「戦士、乾杯！」が収録された時であった⁽⁶⁾。『さよなら・再見』の刊行からすでに十数年が経過していた。『バナナポート』は黄春明の同作のほかに、白先勇「永遠の輝き」、「赤いつつじ」、張系国「バナナポート」、「シカゴの裏街」、鍾

理和「故郷」、李喬「密告者」、施明正「尿を飲む男」、李昂「G・Lへの手紙」などを収録し、戦後台湾文学における代表的な短編小説を集めたアンソロジーとなっている。

本稿の第一節で述べたように、日本でも一九九〇年代に入ると中国現代文学研究者が台湾文学研究に関心を寄せ始めた。『バナナボート』もそうした中国文学研究者たちの企画によって誕生した書籍であり、一九九〇年一〇月から一九九一年二月まで「発見と冒険の中国文学」シリーズ全八巻の一冊として刊行された。このシリーズでは鄭義『古井戸』、莫言『中国の村から——莫言短篇集』、巴金『リラの花散る頃——巴金短篇集』、茅盾『藻を刈る男——茅盾短篇集』、張愛玲、楊絳『浪漫都市物語——上海・香港・北京』、北島、史鉄生『紙の上の月——中国の地下文学』、ザシダワ、色波『風馬の耀き——新しいチベット文学』など中国や香港、チベットの同時代文学を含んでいる。⁽⁶⁾現代中国語文学としての射程の中に台湾文学を見据え、黄春明の作品も取り上げていたのであった。

黄春明「戦士、乾杯！」の翻訳者は下村作次郎である。同作は、一九七三年夏、ドキュメンタリー番組『芬芳宝島』制作の取材を目的に、台湾南部に位置する屏東県の山間部に踏み入った黄という青年を主人公として、彼がシオンという名のルカイ族の男の家庭に一泊する話である。物語は一人称の語りで進められ、「私」は室内に掛けられた額縁に見入ってしまう。壁にはキリスト受難図の隣に、戦時中に日本兵としてフィリピンで戦死した義父、終戦直後に中国で共産党兵の捕虜となった父、国民党兵として戦後を生きた長兄の写真が並ぶ。「私」は彼らの写真を眺めながら、シオンからかつて平地の漢民族と戦った祖先の様子や日本の侵略に抵抗した祖父の話を聞かされ、目の前で何重にも重なり合う歴史の厚みに思わず、むせびいつてしまう。黄春明は作品の結末近くで次のように記している。

私は今でも覚えている。涙に濡れたノートに、思うように動かないボールペンを握ってゆがんだ字でこう書いたのだ。世界のどこにこれ以上辛酸をなめた歴史があるのか。どこにこれ以上悲惨な少数民族（翻訳ママ）の運命があるのか、と。壁を見ようが見まいが同じだった。それぞれの時代の戦士の映像が、目の前に浮かびつづけていた。酒がまわり、その勢いでほとんど意識がなくなりそうになった時、それらの映像はいっそうくつきりと浮かびあがった。私はもう数滴しか残っていないコップを持ちあげると、写真がいっぱいに並んだ壁に向かって心の中で叫んだ。「戦士、乾杯！」⁽⁶⁵⁾

「戦士、乾杯！」では台湾原住民族が向き合った複雑で苦渋に満ちた歴史が、黄がシオンの家に宿泊する展開で一挙に凝縮されていく。こうした歴史の流れを淡々と語るシオンを前にして、「私」は異民族である平地の漢民族や日本人からも侵食され続けてきた山地原住民族のことを思い、彼らに対する罪の意識を強く感じざるを得ないのであった。『バナナポート』の巻末には、同書で翻訳者の一人である野間信幸による作品解説が附せられている。野間信幸はそこで、「台湾郷土の再発見の旅の果てに探りあてた「原罪」は、作者の深い郷土愛に支えられた贖罪意識によって救われている」と述べている。同書に収録された七作家九作品の中でも「戦士、乾杯！」の分量は短く、およそ一万二〇〇〇字程度の短編小説であるが、作中に秘められた読み手に与える原罪／贖罪の意識は翻訳を通して日本の読者にも強く響いていた。

ところで、「戦士、乾杯！」が翻訳された直後の一九九一年一月、黄春明は沖縄で開催された国際シンポジウム「占領と文学」に出席するため再来日していた。この国際シンポジウムは一月一六日と一七日の二日間にわたり、日本社会文学会が中心となり組織した同シンポジウム実行委員会、沖縄県国際交流財団、沖縄タイムスの三者による共催で、那覇市の沖縄タイムスホールを会場に開催された。沖縄が米軍の占領統治から本土復帰

二十年を果たしたことを記念し、文学の領域からアジア・太平洋地域における占領がもたらした被害と加害の関係を追求するものであった。⁶⁷そのため、シンポジウムには台湾をはじめ中国、韓国、フィリピン、インドネシア、シンガポール、タイ、アメリカ、グアム、旧ソ連から作家や文芸評論家、文学研究者らが招聘され、日本の作家や詩人、大学教員と交流し討論した。黄春明自身は、シンポジウム二日目の午前に「台湾の「内なる占領」という講演題目で問題提起をしていた。講演の中では、頼和や楊逵、呂赫若、呉濁流らの代表作に触れながら台湾の歴史と民衆の抵抗を描き出す台湾文学作品の紹介から始まり、戦後の中国語作品では陳映真の「ワシントンビルディング」（華盛頓大樓）シリーズや長編小説「万商帝君」、王禎和の短編小説「小林来台北」とともに、自身の「りんごの味」を取り上げ、戦後台湾社会で繰り返されるアメリカや日本を中心とする多国籍企業による経済侵略を厳しく批判していた。ただし、この時に黄春明は外国企業や多国籍企業からの侵略を訴えるばかりではなく、講演の中では「戦士、乾杯！」を創作するに至った経緯にも触れ、自らも犯してきた占領の罪について語っていたことは注目すべきである。その時に黄春明は次のように語っていた。

一八年前、台湾南部の山奥にある友人の自宅を訪ねた時のことです。壁に掛けられた一枚の写真を見て私は思わず震えました。キリスト受難図のすぐ隣に戦闘帽をかぶった日本兵の上半身の写真があったのです。おそらく集団記念写真からその部分を取って引き伸したものでしょう。そのまた隣にも同じ大きさの上半身が掲げられているのですが、なんとそれは赤い星をつけた八角帽をかぶった人物で、星の中央に「八一」という文字が見えるのです。中国共産党の率いる八路軍の兵士に違いありません。さらにもう一枚、同じ大きさの上半身の写真が目に入ったのですが、映っている人物は台湾国民党政府の海軍陸戦隊の兵士で、「青天白日」の帽章が鮮やかに見えました。驚きがようやく静まり、友人に三枚の写真の関係を聞かせてもらいまし

た。「中略」私はこの今にも崩れ落ちそうな壁にかかっていた写真の由来が分かり、これら三枚の写真から少数民族の占領された歴史の縮図を見出すとともに、私自身の原罪をも発見したのでした。⁽⁶⁸⁾

ここで黄春明は自分自身が感じた原罪の意識を、原住民族や彼らの社会に対して不断に続く侵食の歴史に見出し、それを「内なる占領」として批判的に捉えていた。この点について、文芸評論家であり日本側のパネリストとして出席していた西田勝（一九二八—二〇二一）は、後日当時を振り返り、「日本の植民地であった台湾の中に、さらにもう一つの植民地があった、それが台湾の先住民であることを教えられたわけです。非常に鋭い、内容の鋭い指摘でした。それなら、アイヌは、ほかならぬ沖繩は、と考えさせられました。黄春明さんの問題提起は沖繩のシンポジウムの参加者に強い感銘をあたえました」と言及している。⁽⁶⁹⁾西田はこの時のシンポジウムで黄春明と初めて出会い、その後もシンポジウムやフォーラムで顔を合わせた。一九九七年七月には東京都内で開催された東京都江戸川区職員労働組合主催の平和フォーラム「核と戦争のない緑の21世紀を」にて二人は共に登壇し、一九九八年一月には国立台湾大学法学院で開催された日台シンポジウム「近代日本と台湾」で問題提起者として出席した。⁽⁷⁰⁾また、二〇一二年七月には西田が代表をつとめていた植民地文化学会の主催による年次学術大会にて、黄春明は基調講演者として日本語で演説をし、会場の参加者の共感と賞賛を得ていた。⁽⁷¹⁾

黄春明と西田勝の両者による交流は、それぞれ異なる視角と階層から「内なる占領」、すなわち「内なる植民」について凝視するものであった。西田は黄春明の「戦士、乾杯！」の作品に秘められた内省の視点を日本国内に向け、明治時代以降に同化政策が強化されていった北海道のアイヌをめぐる問題、さらには国内で米軍基地の七割が集中し依然として本土とのあいだで隷属的な関係を強いられていく沖繩の現状を直視していた。西田は「戦士、乾杯！」の物語を日本人にとつての啓示としても捉え、自分たちが抱えながらも解決できないアイヌや沖繩

などに代表される内なる植民の問題を再度強く認識せざるを得なかったと指摘しているのである。このように「戦士、乾杯！」の翻訳は、『さよなら・再見』が翻訳された際に与えた影響とは異なり、作中に内包される内なる植民の問題が、日本の読者にとっても決して無縁ではないことを示すものとなったのである。

こうして一九九一年に「戦士、乾杯！」を収録した『バナナボート』が刊行された後、黄春明の短編小説、中編小説は次々と台湾文学作品を集めたアンソロジーの中に収録されていった。それらにはたとえば一九九八年に出版された『鳥になった男』や二〇〇一年の『鹿港からきた男』などがある。すでに述べたように、これらの二冊はそれぞれ当時出版されていた「台湾現代小説選」と「新しい台湾の文学」シリーズの中で刊行された一部であり、どちらも戦後の台湾文学作品を収録したアンソロジーであった。それらは日本の学術界や読書界での台湾文学に対する関心の高まりを受けて刊行されたものであり、その十年ほど前に『バナナボート』が「発見と冒険の中国文学」シリーズとして刊行された際の事情とは異なる翻訳背景があった。

『鳥になった男』では呉錦発の「鳥になった男」、黄凡「頼索氏の困惑」、郭箏「学校をサボった日」などの短編小説とともに、黄春明の中編小説「放生」が掲載されている。同書が刊行された当時、すでに黄春明の名前は『さよなら・再見』や台湾ニューシネマの原作者として日本で広く知られており、同書に掲載された作者プロフィールでも「日本で最も知られている台湾の作家」と紹介されていた。「放生」は台湾北東部蘭陽平原に住む老夫婦の金足と阿尾の日常を描いていく。作中では金足と阿尾が暮らす宜蘭県大坑苦の田園風景を映し出すと同時に、武老坑溪の河口で有毒有害物質を排出し続ける化学工場やセメント工場の不法行為、それを見て見ぬふりをする政治家の不正と不徳、さらには故郷の自然を守ろうとして投獄された老夫婦の息子である文通の生き方さえも描き出していく。

一方、『鹿港からきた男』では、黄春明の「銅鑼」と「坊やの人形」の二作が順に同書の巻頭に収録されてい

(74) する。これら二編の小説の直後には、王拓「金水壩」、宋沢萊「腐乱」、王禎和「シヤングリラ」「鹿港からきた男」など郷土文学作家の代表作が続く。「銅鑼」は作者自身の生まれ故郷である羅東鎮を舞台に、周囲から正直者と馬鹿にされる男の姿を描いていく物語である。主人公の欽公は半生にわたって銅鑼を叩いてきたが、拡声器を載せて走り回る三輪自転車が出てくるからは仕事も奪われ、貧しい暮らしを強いられている。銅鑼打ちの仕事が途絶えてから、茄冬の木の下で貧乏人とともに金持ちが棺桶担ぎの人夫を集めるのを待つが、彼の頭をよぎるのは銅鑼を叩き鳴らしていた懐かしい過去の記憶である。やがて欽公は役所の男から銅鑼打ちの仕事の依頼を受けて意気揚々とするが、打ち始めた直後に止めさせられ、落胆しているあいだに自分の銅鑼を割ってしまう。「坊やの人形」では、坤樹と阿珠という結婚直後の貧しい若夫婦が主人公となる。坤樹は体の前後に大きな看板を吊した、いわゆるサンドイッチマンの仕事が続けながら赤貧の暮らしを支えている。何重にも重ねた手作りの衣装と道化師のような厚化粧で町中をくまなく歩き回り日銭をようやく稼ぎ、雇用主である映画館の支配人や町の子供たちからは軽蔑されながらも、妻や生まれたばかりの子供のために仕事に出る。やがて支配人から三輪自転車をこいで宣伝するように指示されて喜ぶが、厚化粧をする必要のなくなった自分の素顔を見て泣き出す自分の子供を前にして、坤樹は再びおしろいを手に化粧を塗るのであった。日本では一九八〇、九〇年代に侯孝賢監督の代表作『坊やの人形』が何度も上映されたため、その原作として小説の作品名はつとに知られていたが、日本の読者が翻訳を通して物語に直接触れることができたのは、実質的にこの時が初めてであった。

黄春明の作品はいずれも地方の田舎町や農村に生きる純朴な人々の暮らしぶりをユーモアあふれる筆致で描き出しながらも、その背後に潜む資本主義の浸透が社会にもたらした弊害と環境破壊の問題を訴える点が目につく。農村部を中心にその土地の風土やそこで生きる人々の心情、風習などを巧みに描き出し、その一方で高度成長が続いていく台湾社会で経済活動がもたらした負の側面の大きさ、さらには社会の下層民が抱えざるを得ない困難

さへも作中で訴えていくのは、戦後一九六〇、七〇年代に湧き起った台湾郷土文学に内包される最大の文学的特徴であったと言える。二〇〇一年に『鹿港からきた男』が刊行されるより前に台湾の郷土文学作品が翻訳されたことはあつたが、同書は黄春明のほか王拓や宋沢萊、王禎和などの郷土文学作家の代表作を収めたことで、戦後台湾文学における「郷土文学」のあり方が、ようやく日本の一般読者に向けても実体をもつてより具体的に伝わったと言えるのであつた。

黄春明の「銅鑼」と「坊やの人形」は一九六〇年代末に発表した初期の作品であり、一方「放生」は一九八〇年代末の小説である。日本ではわずか三、四年のあいだにこうした代表的三作が集中的に翻訳され、黄春明の作風や創作手法、そこでの創作意図などは、さらに日本の読者に浸透していった。『鹿港からきた男』を含む「新しい台湾の文学」シリーズの刊行は、新聞各紙の書評欄などでも好意的に紹介され、読者層の台湾文学に対する関心を高めるのに一役買っていた。こうしたシリーズ全体への反響からも、黄春明作品に対する注目の度合いをうかがい知ることができる。

黄春明作品にとつて最大の特徴でもある「郷土文学」について、日本における台湾文学の入門書とも言える山口守編『講座 台湾文学』では詳細な解説を行っている。山口守によれば、郷土文学はそもそも日本と台湾では異なる意味合いを持つ概念であつたという。一般的に、日本で郷土文学といえば、明治時代末にドイツ文学者の片山正雄が発表した論文「郷土芸術論」(『帝国文学』第一二巻第四号、第一二巻第五号、一九〇六年四、五月)により近代日本へ初めて移入したと言われる郷土文学の概念を想起させるものである。一九世紀末から二〇世紀初頭のドイツでは郷土芸術 (Heimatkunst) や郷土文学 (Heimatdichtung) が注目されていたが、そこでの郷土芸術とは芸術至上主義的あるいは耽美主義的とも言えるネオロマンチズムに代表される退廃的な都市文学を否定するものであり、田園地帯や地方など郷土特有の生活習慣や風俗を讃える文学運動とも言えた。片山正雄は

そうした概念を日本へ紹介するために国内で初めて郷土芸術という言葉を用いた。やがて日本では、そこから派生し、郷土文学は農民文学や地方文学の同義として理解されていったのであった。

一方、台湾での郷土文学はどのようなものなのか。『鹿港からきた男』の巻末での作品解説に相当する山口守「郷土文学から台湾文学へ」で言及があるように、台湾の文学界では二〇世紀のあいだでも郷土文学をめぐる論争が三度発生していた。一度目は一九三〇年代の黄石輝らによる台湾話文論戦、二度目は一九四〇年代の『台湾新生報』をめぐる郷土文学論戦、そして三度目は一九七〇年代の郷土文学論戦である。それらはいずれもそれぞれ異なる当時の社会的背景や問題提起をもとにして沸き起こった文芸思潮であり、右に述べた日本の郷土文学をめぐる概念とも重なるものではない。このように日本と台湾では郷土文学という語句に内包される概念に差が見られることもあり、『鹿港からきた男』は実質的には郷土文学作品を紹介する作品集であったにもかかわらず、その書名にはあえて「郷土文学」という言葉を用いていなかった。とはいえ、山口は「郷土文学から台湾文学へ」の末尾にて、「郷土文学及び郷土文学を巡る論争など当時の文学状況そのものが、後に認知される「台湾文学」という用語のプロトタイプになっている」と述べてもいる。注目したいのは、この作品解説において、同書に収録される郷土文学の出現が徐々に台湾文学という特殊性を浮き彫りにしていったことを指摘している点である。つまり、それは日本の読者が黄春明作品に見られるような台湾郷土文学の作風を知ること、やがて日本の文脈で共有されている郷土文学の範疇とは異なる台湾の郷土文学のあり方に気づき、「台湾文学」の独自性さえも理解していくことに繋がっていたのであった。こうして台湾の郷土文学という概念が日本の学術界や読書界に浸透することで、日本では二〇〇〇年代以降に台湾文学という言葉が社会的に定着していった。そうした潮流の中では、黄春明も『さよなら・再見』や台湾ニューシネマの原作者といった理解の枠組みだけではなく、社会の下層が抱える問題点さえも批判的に描き出す郷土文学の旗手としての評価も加えられていったのである。

こうした黄春明作品に対する関心は近年でも続いている。二〇二一年には黄春明の短編小説集『溺死した老猫——黄春明選集』が刊行されるなど、黄春明は日本の読書界で依然として台湾文学界を代表する作家の一人として名が通っている。⁽⁸¹⁾ 同書の編訳者はすでに述べた西田勝である。西田は台湾文学研究者ではなく日本近代文学を専門とする文芸評論家であり、一九九一年の国際シンポジウム「占領と文学」で初めて黄春明と面会して以来、黄に対して強く関心を抱いてきた。⁽⁸²⁾ 一九九九年五月には西田自身が個人で発行していたニュースレター『地球の一点から』でも、黄春明の最初期の作品である「城仔」下車⁽⁸³⁾（一九六一）を翻訳していた。⁽⁸⁴⁾ そこでは同時に、一九九八年末に黄春明の自宅で行われたインタビュー録「龍眼の熟する季節」も掲載されている。⁽⁸⁵⁾ そうした経緯があり、『溺死した老猫』の「編訳者あとがき」にも記されているように、同書は西田が三十年來個人的に読み親しんできた黄春明作品を翻訳して一冊にまとめた日本版オリジナルアンソロジーであった。⁽⁸⁶⁾ そこで収録されるのは一九五〇年代末から二〇一〇年代の作品まで幅広い。黄春明が二一歳の時に「春鈴」のペンネームで初めて創作した「道路清掃人夫の子供」（一九五六）をはじめ、「城仔」下車（一九六一）、「青番爺さんの話」（一九六七）、「溺死した老猫」（一九六七）、「海を訪ねる日」（一九六七）、「坊やの大きな人形」（一九六八）など一九六〇年代に発表した初期の代表作、さらには「今や先生」（一九八六）、「花の名前を知りたい」（一九八七）、「死んだり生き返ったり」（一九九八）、「人工寿命同窓会」（二〇一六）など一九八〇年代後半以降に発表した諸作品も並ぶ。⁽⁸⁶⁾

『溺死した老猫』の刊行直後には、新聞や雑誌で書評が掲載されるなど、日本の読書界でも一定の反響があった。⁽⁸⁷⁾ たとえば、星名宏修による書評では、「城仔」下車で描かれる登場人物の会話について指摘している。同作は宜蘭県の港町である南方澳行きのバスに乗った老女が主人公である。女は孫を連れて、娼婦として生計を支える娘を訪ねるが、不慣れなバスに乗ったため下車すべき場所を乗り過ごし、夕闇が迫る中で途方に暮れる。こ

の物語に関して星名宏修は、翻訳では女と孫の会話を標準語ではなく、尾道地方の広島弁風にして訳し出していることを指摘している。そして、こうした尾道地方の広島弁風の訳し方は、同書に収録されたそれ以外の作品でも同様に使われているのであった。その理由について、西田勝は編訳者あとがきで「農村を扱った作品については鄙びた感じを出したいため、話し言葉などを広島は尾道地方の方言風、(全くの方言だと却って読解困難となるため、どこまでも「風」に留めた)にした」(傍点と注釈は原文ママ)と述べている。これまで日本では黄春明作品が複数翻訳されてきたが、ここまで明確に方言あるいは方言風な文体を使うことはなかった。倉本明知によれば、従来の翻訳では多くが東京弁のべらんめえ口調か標準語であったのに対して、西田の翻訳では方言の使用が際立っているという。⁽⁸⁸⁾ もっとも原作者である黄春明自身は、そうした訳者の工夫に対して、「広島弁のことですが、方言というのは誰が使ったのか分からないけれど、民衆が使ったもので、一番味がある。面白い」と肯定的に捉えているが、一方では方言を使った文体を多用することで物語全体の田舎臭さが多分に強調されてしまうことも事実であった。翻訳を通して日本の読者には空間的な周縁性は伝わるが、鄙びた田舎という心象ばかりが目立ち、全体的に見れば不必要なステレオタイプを抱え込む恐れがあるという倉本の指摘は妥当性があると言えよう。⁽⁸⁹⁾

ここまで確認してきたように、黄春明作品が代表する戦後台湾の郷土文学作品はその地方性ばかりが強調されるわけではなく、そこでは社会の下層が抱える問題への告発、あるいは文明全体に対する批判といった意識も内包されていた。『溺死した老猫』では台湾の郷土文学に関する解説については多く言及せず、多数の黄春明作品を取り上げた。日本では台湾の郷土文学に対する解釈が台湾文学の独自性として理解されていく中で、黄春明作品に対する翻訳と紹介にも工夫と変化が生まれ、原文が持つ枠組みを越えた多様な影響を生み出すようになったのであった。

四、短編小説集『溺死した老猫』——黄春明選集』での社会的連帯

一九七五年に『現代中国短篇小説選』で黄春明作品が翻訳掲載されて以来、すでに二〇編あまりが日本の読者に読まれてきた。⁽⁹²⁾戦後日本で紹介された台湾文学作品の中で、黄春明がもつとも広く名が知られている台湾作家の一人であることはまちがいない。これまで日本では主に中国語圏文学研究者が黄春明作品の翻訳を手がけてきたが、直近の作品集である『溺死した老猫』——黄春明選集』は日本文学を専門とする文芸評論家の西田勝の翻訳によるものである。西田は同書に収録した黄春明作品に関する自身の評論「黄春明の眼差し——社会的弱者・ユーマア・文明批判」の中で、次のように黄春明作品の特徴に注目していた。

黄春明文学の大きな特徴の第一は、このような下積み（93）の女性「代表作「海を見つめる日」の主人公である白梅などを指す、引用注」をふくめての社会的弱者——貧しい人々や老人や心身障害者に対して限りなく温かいまなざしが注がれていることだろう。「中略」次に黄春明文学の大きな特徴の第二は、他人だけではなく、自分をも「おかしみ」をもって観る、つまり喜劇的に観るユーマアが息づいていることだろう。⁽⁹³⁾

黄春明作品の支柱である社会的弱者への眼差し、人間が老いゆく中で感じる死生観、さらには作中で彷彿するユーマアなどに関しては、これまでも台湾の先行研究の中で盛んに論じられてきた。⁽⁹⁴⁾それは日本でも同様であり、中国語圏文学研究者を中心に「さよなら・再見」、「銅鑼」、「坊やの人形」、「海を見つめる日」など、とりわけ一九六〇年代から七〇年代初期に発表された作品が考察されてきた。そうした関心と比べると、西田勝が編訳した『溺死した老猫』では収録作品の発表年が一九五六年から二〇一六年までと幅広く、日本の中国語圏文学研究

者とは異なる視角から黄春明作品を読み、評価していたことがうかがえる。

文芸評論家として活動した西田勝には近代日本文学の批評が目立つが、そうした論考の中でも福田恆存（一九二一—一九九四）に関する言説は、西田の黄春明文学に対する評価を探るうえでも注目に値する。「ハムレット」や「マクベス」などシェークスピア作品の翻訳も手がけた福田恆存は著名な劇作家であったが、同時に戦後日本を代表する批評家の一人としても知られている。文芸批評家としての福田は、戦争末期から戦後初期にかけて発表した評論「私小説のために」（一九四二）や「私小説的現実について」（一九四七）などで、日本の近代文学の礎を作った自然主義文学を取り上げ、その典型とも言える日本の「私小説」文化を徹底して批判した⁽⁹⁵⁾。近代日本文学の精神を問いただと同時に、それらが個人に対する関心に引きずられ、忠実に自己の関心ばかりを描き通す独り善がりな文学作品と指摘したのである。こうした福田の論点に西田は共鳴し、感化されたという⁽⁹⁶⁾。西田は福田について論じた「逆説としての戦後——福田恆存と私」の中で、福田による日本の私小説における「白い手の独善」——働かない者たちが書く個人的事情——への批判に注目し、日本近代文学の展開の側面を読み解いた⁽⁹⁷⁾。後に西田は福田の論点を広げて、私小説的な作風が広範に受け入れられた戦前の文学状況に比べ、戦後に期待できたのは、民衆とのあいだでの連帯や協同に生きる作家であり、そうした書き手が描き出す作風にこそ民衆の生活苦にまみれた哀切な情感とユーモアがうまく働いていると総括してもいる⁽⁹⁸⁾。つまり、西田は福田の批評を参照しながら、こうした戦前の私小説的な作風に代表される日本の近代文学が社会的問題意識に欠けた風潮であったとして批評したのであり、その反動から、福田が期待した民衆の生活にまみれた哀切な情感とユーモアを外国文学である黄春明作品の中に見出したのであった。西田は二〇一二年七月に東京で開催された植民地文化学会の年次学術大会において黄春明と対談し、その中で次のように発言していた。

今から二一年前、黄春明さんと出会い、彼の小説を読んで、これらの田岡嶺雲や福田恆存の主張が思い出され、私が理想としていた文学の一つの特質が台湾にあると知りました。黄春明さんの作品は、まさに都市や農村の貧しい人々の境遇を、熱い同情をもって生き生きと描き出しているだけではなく、福田のいう「民衆の世間苦にまみれた哀切な情感」とユーモアが、歳を経るとともに、いつそう色濃くなっているのを発見しました。⁽⁹⁾

そうした西田勝が黄春明作品に見いだした文学のあり方については、編訳した『溺死した老猫』でも十分に表れている。一九六〇年代の地方都市や田舎で貧困の中で子供を産み育てることで生きることへの希望を見つける「道路清掃人夫の子供」、「城仔」下車、「青番爺さんの話」、「海を見つめる日」、「坊やの人形」、田舎町で購読者のいない新聞を読む老人たちの日常を描きメディアの嘘と不誠実さを突く「今や先生」、老人や周囲の者たちの死への感情を描きながら世相を風刺する「溺死した老猫」、「死んだり生き返ったり」、「人工寿命同窓会」など、そこではいづれも貧しい民衆が繰り広げるユーモアあふれる作風を好んで訳し出している。過去から現在に至るまでの黄春明作品の作風を分析した董淑玲の研究によれば、これまでに六〇編近くの短編小説、中編小説が黄春明によって創作されてきたが、そうした中でも老人を主人公にして死と直結させる描き方は多いとはいえず、全体の一割弱ほどでしかないという。⁽¹⁰⁾ただし、同書での翻訳作品を見ると、「青番爺さんの話」や「溺死した老猫」、「今や先生」、「死んだり生き返ったり」など老人と死をつなぐ物語が集中的に選択され、翻訳されているのがわかる。この時に日本で翻訳紹介された黄春明作品において、老人と死、病いは物語内での関係性が深く、西田による編訳には大きな特徴が出ていた。それは西田自身が黄春明と同世代の高齢であったからという理由だけではなく、社会性の強い物語内容をユーモアで支えることで、そこに作者と読者、さらには社会の民衆との連帯を生

み出していると見いだしたからである。こうした点は現代日本の翻訳者や読者が黄春明作品を肯定的に受け入れてきた本質であったといえる。

五、結びに

本稿では黄春明作品の日本語訳が日本社会に与えてきたその影響について考察した。日本では一九七五年の本橋春光編訳による『現代中国短篇小説集』に収録されたが、当時その翻訳はほとんど注目されることはなかった。しかし、一九七九年に黄春明の代表作である『さよなら・再見』が翻訳刊行されたことで、その状況も変わっていった。『さよなら・再見』が出版され、同書冒頭に収録された「さよなら・再見」の物語が日本の読者によって受容されていく中で、黄春明作品に対する評価は日本人男性の台湾での買春観光をめぐる風刺的な論点から、原作が本来持っていた戦後日本のアジア諸国に対する経済的・文化的植民を批判する論点へと移っていったのである。また、一九九一年には戦後台湾文学の作品集である『バナナポート——台湾文学への招待』の中で黄春明「戦士、乾杯！」が翻訳されたことで、日本の読者には内なる植民の問題さえも想起させ、黄春明作品を起点に沖縄やアイヌをめぐる問題への共感を促す作用をもたらしていた。そして一九九〇年代末から二〇〇〇年代にかけて、台湾郷土文学の代表作として黄春明作品の「銅鑼」や「坊やの人形」、「放生」などが翻訳紹介されていくに従って、日本の文脈とは異なる台湾での郷土文学のあり方が読者に提示されていったのである。黄春明作品の特徴は、物語中でユーモアあふれる展開でもって社会の底辺に生きる民衆の姿を描くことだと言われる。こうした黄春明作品の作風は日本でも高く評価されてきた。翻訳者の西田勝が文芸評論家である福田恆存の主張する近代日本文学に対する期待を黄春明作品の中に見いだしたように、ユーモアに支えられた文学作品が民衆との連帯

を示す中で、黄春明作品は日本の読者に大きな省察を与えたのであった。このように黄春明の作品から日本の読者が得てきたものは実に多く、多層的であったと言える。

ほかにも黄春明と日本の関係は深く、創作において日本のテレビ番組や小説からインスピレーションを多く受けていたとも言われている。たとえば、黄春明は一九七〇年代初めに映像制作の方面でも活躍し『貝貝劇場——哈哈学園』という全九〇回のテレビ番組制作にも関わっていたが、これは一九六〇年代半ばから後半にかけてNHKで放映されていた人形劇『ひよっこりひよたん島』からアイディアを得た人形芝居であった。貝貝劇場は戒厳令下に政治的嫌疑を受けたことが理由となり、放映が中止されてしまった⁽¹⁰⁾。しかしその後も、黄春明はNHKが放映していた『ディスカバー・ジャパン』というドキュメンタリー番組にヒントを得て、台湾でドキュメンタリー映画『芬芳宝島』を撮影し、そのうち「大甲媽祖回娘家」や「淡水暮色」では自らが撮影監督を担当してもいた⁽¹¹⁾。NHK『ディスカバー・ジャパン』は高度経済成長下で失われていく日本の郷土を再認識させていく番組であるが、そのドキュメンタリー制作を通じて、黄春明は台湾における内なる植民の事実について知り、「戦士、乾杯！」の創作へと展開していったのであった。

また、黄春明は一九九三年に『毛毛有話』という作品を発表しているが、これも岩波新書の松田道雄『私は赤ちゃん』(一九六〇)から影響を受けて創作したものであった。『毛毛有話』は赤ん坊を語り手として、家庭や社会での人間関係、さらには大人の世界観などを描いていく児童文学である。一方、松田道雄の代表作『私は赤ちゃん』は二〇一九年現在で八六刷が刊行されたロングセラーであり、その内容は経済成長へと進む戦後の日本社会を背景に、赤ん坊の視点から新米父母向けに栄養指導や子供の看病、育児方法を教えるものであった。黄春明はその内容や社会的背景を台湾社会に置き換えながら、児童文学のかたちアレンジして創作したのである。

こうした『芬芳宝島』や『毛毛有話』の創作背景に見られる日本との接点は、従来の黄春明研究ではほとんど

取り上げられることがなかったものである。NHK『ディスカバー・ジャパン』を起点に、黄春明のドキュメンタリー映画『芬芳宝島』、さらには短編小説「戦士、乾杯！」などとの関係を見ても明らかのように、日本からの影響は無視できない程度で黄春明の創作に確かな影響を与えている。日本の著作やテレビ番組がどのような形で黄春明を刺激し、彼に再創作の可能性を与えていたのかといった点からの考察については、今後の黄春明研究の展開がまたれるところである。

注

- (1) NPO法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク編『台湾書旅——台湾を知るためのブックガイド』（台北駐日経済文化代表処台湾文化センター、二〇二二年）三頁。
- (2) 竹内好「もつと台湾を——中国を知るために（五七）」『中国』（第六三号、一九六二年二月）九七―九八頁。
- (3) 戴國輝「台湾」『アジア経済』（第一〇巻第六・七号、一九六九年六月）五四―五六頁。戴國輝はこのほかに、台湾研究は片手間に済ませるものだという学術界の雰囲気、戦前の台湾研究者たちの物故や沈黙なども挙げている。
- (4) 邱永漢『濁水溪』（現代社、一九五四年）、邱永漢『密入国者の手記』（現代社、一九五六年）、邱永漢『香港』（近代生活社、一九五六年）、邱永漢『刺竹』（清和書院、一九五八年）、邱永漢『惜別亭』（文芸評論新社、一九五八年）、呉濁流『アジアの孤児』（二三書房、一九五六年）、呉濁流『歪められた島』（ひろば書房、一九五七年）。このほかに雑誌記事では、一九六九年四月から八月にかけて呉濁流『無花果——台湾七十年の回想』が『中国』に連載されている。この掲載では「呉濁流作、編集部訳」となっているが、松永正義と山口守によれば、実際には呉濁流自身による日本語原文であったが、日本語のまま発表することが憚れたため「編集部訳」という形式を使い掲載したという（二〇一九年六月七日に福岡大学で開催された日本台湾学会での松永と山口による発言）。
- (5) 呉濁流『夜明け前の台湾——植民地からの告発』（社会思想社、一九七二年）、呉濁流『泥濘に生きる——苦悶する台湾の民』（社会思想社、一九七二年）。
- (6) 王育徳『台湾——苦悶するその歴史（増補改訂版）』（弘文堂、一九七〇年）、史明『台湾人四百年史——秘められた植民地解

- 放の一断面(増補改訂版)』(新泉社、一九七四年)。
- (7) 中華民国「笠」編集委員会編『華麗島詩集——中華民國現代詩選』(若樹書房、一九七〇年)、北原政吉編『台湾現代詩集』(もぐら書房、一九七九年)。
- (8) 張文環「地に這うもの」(現代文化社、一九七五年)、陳紀澄「藤晴光詠」『荻村の人びと——動乱中国の渦巻』(新国民出版社、一九七四年)、陳若曦「竹内実詠」『北京のひとり者』(朝日新聞社、一九七九年)。
- (9) 黄春明「田中宏、福田桂」詠』「さよなら・再見」(めぐみ、一九七九年)。
- (10) 洪醒夫ほか「松永正義ほか詠」『彩鳳の夢——台湾現代小説選Ⅰ』(研文出版、一九八四年)、李双沢ほか「陳正醒ほか詠」『終戦の賠償——台湾現代小説選Ⅱ』(研文出版、一九八四年)、鄭清文ほか「中村ふじゑほか詠」『三本足の馬——台湾現代小説選Ⅲ』(研文出版、一九八五年)、呉錦発ほか「中村ふじゑ、坂本志げ子詠」『鳥になった男——台湾現代小説選Ⅳ』(研文出版、一九八八年)。
- (11) 白先勇「中村ふじゑ詠」『最後の貴族』(徳間書店、一九九〇年)、劉大任「岡崎郁子詠」『デイゴ燃ゆ——台湾現代小説選別巻』(研文出版、一九九一年)、三毛「妹尾加代詠」『サハラ物語』(筑摩書房、一九九一年)。
- (12) 朱天文「田村志津枝詠」『安安の夏休み』(筑摩書房、一九九二年)、朱天文「小針朋子詠」『世紀末の華やき』(紀伊國屋書店、一九九七年)。なお、黄春明作品が原作となった台湾ニューシネマは、『坊やの人形』(オムニバス映画であり第一話が侯孝賢監督「坊やの人形」、第二話が曾壮祥監督「小琪の帽子」、第三話が万仁監督「りんこの味」、一九八四年「日本初上映年、以下同じ)、『海を見つめる日』(王童監督、一九八五年)、『さよなら・再見』(葉金勝監督、一九八七年)などであり、朱天文作品では『冬冬の夏休み』(侯孝賢監督、一九九〇年)、『ナイルの娘』(侯孝賢監督、一九九〇年)などが映画化された(暁峻創三「中華電影データブック 完全保存版」(キネマ旬報社、二〇一〇年)を参照した)。
- (13) 山口守監修、白先勇ほか「野間信幸、下村作次郎、澤井律之、山内一恵詠」『バナナポート——台湾文学への招待』(JICC出版局、一九九一年)、藤井省三編『笑いの共和国——中国ユーモア文学傑作選』(白水社、一九九二年)、藤井省三編『現代中国短編集』(平凡社、一九九八年)。
- (14) 呉錦発編「下村作次郎監訳」『悲情の山地——台湾原住民小説選』(田畑書店、一九九二年)。
- (15) 下村作次郎編訳「名前を返せ——モナノン／トパス・タナピマ集』(草風館、二〇〇二年)。
- (16) 魚住悦子編訳「故郷に生きる——リカラツ・アウー／シヤマン・ラボガン集』(草風館、二〇〇三年)、中村ふじゑほか編訳『永遠の山地——ワリス・ノカン集』(草風館、二〇〇三年)、柳本通彦、松本さち子、野島本泰編訳『海よ山よ——十一民族黄春明作品の日本語訳における社会的意義

- 作品集』(草風館、二〇〇四年)、紙村徹編訳『神々の物語——神話・伝説・昔話集』(草風館、二〇〇六年)、下村作次郎ほか編訳『原住民文化・文学言説集1』(草風館、二〇〇六年)、下村作次郎ほか編訳『原住民文化・文学言説集2』(草風館、二〇〇七年)、下村作次郎ほか編訳『晴乞い祭り——散文・短編小説集』(草風館、二〇〇八年)、下村作次郎、魚住悦子編訳『海人・獵人——シヤマン・ラポガン／アオヴィニ・カドウスガヌ集』(草風館、二〇〇九年)。
- (17) 巴代『魚住悦子訳』『タマラカウ物語(上)——女巫デীগクワン』(草風館、二〇二二年)、巴代『魚住悦子訳』『タマラカウ物語(下)——戦士マテル』(草風館、二〇二二年)。
- (18) シヤマン・ラポガン『魚住悦子訳』『冷海深情——シヤマン・ラポガンの海洋文学1』(草風館、二〇一四年)、シヤマン・ラポガン『下村作次郎訳』『空の目——シヤマン・ラポガンの海洋文学2』(草風館、二〇一四年)、シヤマン・ラポガン『下村作次郎訳』『大海に生きる夢』(草風館、二〇一七年)。
- (19) 李昂『藤井省三訳』『夫殺し』(宝島社、一九九三年)。
- (20) 張瓊方『殺夫』的致命吸引力』『台湾光華雜誌』(二〇〇〇年十一月) <https://www.taiwan-panorama.com/zh/Articles/Details?guid=9ca3cba5-960f-40f5-97cc-bef74d62eb7&langId=1&CatId=10&postname=%E3%80%8C%E6%AF%BA%E5%A4%B8%97%E4%BA%95%E7%9C%81%E4%B8%89> (二〇二四年三月二四日アクセス)
- (21) 李昂『櫻庭ゆみ子訳』『迷いの園』(国書刊行会、一九九九年)、李昂『藤井省三訳』『自伝の小説』(国書刊行会、二〇〇四年)、李昂『藤井省三訳』『海峡を渡る幽霊——李昂短篇集』(白水社、二〇一八年)、李昂『藤井省三訳』『眠れる美男』(文藝春秋、二〇二〇年)。
- (22) 山口守編訳『台北ストーリー』(国書刊行会、一九九九年)、山口守編訳『鹿港からきた男』(国書刊行会、二〇〇一年)、松浦恆雄編訳『客家の女たち』(国書刊行会、二〇〇二年)。
- (23) 朱天心『清水賢一郎訳』『古都』(国書刊行会、二〇〇〇年)、施叔青『藤井省三訳』『ヴィクトリア倶楽部』(国書刊行会、二〇〇二年)、李喬『岡崎郁子、三木直大訳』『寒夜』(国書刊行会、二〇〇五年)、白先勇『陳正醒訳』『孽子』(国書刊行会、二〇〇六年)、白先勇『山口守訳』『台北人』(国書刊行会、二〇〇八年)、朱天文『池上貞子訳』『荒人手記』(国書刊行会、二〇〇六年)、張系国『山口守、三木直大訳』『星雲組曲』(国書刊行会、二〇〇七年)。
- (24) 邱妙津『垂水千恵訳』『ある鰐の手記』(作品社、二〇〇八年)、紀大偉『白水紀子訳』『膜』(作品社、二〇〇八年)、白水紀子編訳『新郎新夫』(作品社、二〇〇九年)。同シリーズではこのほかに、評論集として垂水千恵編訳『父なる中国、母(クイ

- ア) なる台湾?』(作品社、二〇〇九年)も刊行された。
- (25) 陳雪「白水紀子訳」『橋の上の子ども』(現代企画室、二〇一一年)、洪凌「櫻庭ゆみ子訳」『フーガー——黒い太陽』(あるむ、二〇一三年)、徐嘉沢「三須祐介訳」『次の夜明けに』(書肆侃侃房、二〇二〇年)、李屏瑤「李琴峰訳」『向日性植物』(光文社、二〇二二年)。
- (26) 李永平「池上貞子、及川茜訳」『吉陵鎮ものがたり』(人文書院、二〇一〇年)や張貴興「松浦恆雄訳」『象の群れ』(人文書院、二〇一〇年)、黄錦樹「大東和重ほか訳」『夢と豚と黎明』(人文書院、二〇一一年)、荒井茂夫編訳『白蟻の夢魔』(人文書院、二〇一一年)。
- (27) 王徳威ほか編訳『華語文学の新しい風』(白水社、二〇二三年)。
- (28) 鍾肇政「中島利郎訳」『永遠のルビナス——魯冰花』(研文出版、二〇一四年)、鍾肇政「澤井律之訳」『怒濤』(研文出版、二〇一四年)、鍾理和「野間信幸訳」『たばこ小屋・故郷——鍾理和短篇集』(研文出版、二〇一四年)、葉石濤「中島利郎訳」『シラヤ族の末裔・潘銀花——葉石濤短篇集』(研文出版、二〇一四年)、李喬「三木直大、明田川聡士訳」『曠野にひとり——李喬短篇集』(研文出版、二〇一四年)。
- (29) 李喬「明田川聡士訳」『藍彩霞の春』(未知谷、二〇一八年)、鍾肇政「永井江理子訳」『ゲテテ激情の書』(未知谷、二〇一八年)、曾貴海「横路啓子訳」『曾貴海詩選』(未知谷、二〇一八年)、利玉芳「池上貞子訳」『利玉芳詩選』(未知谷、二〇一八年)、蔡素芬「黄愛玲訳」『明月——クリスタルムーン』(桜出版、二〇一四年)、蔡素芬「黄愛玲訳」『オリブの樹』(桜出版、二〇一六年)。
- (30) 吳明益「天野健太郎訳」『歩道橋の魔術師』(白水社、二〇一五年)、吳明益「天野健太郎訳」『自転車泥棒』(文藝春秋、二〇一八年)、吳明益「倉本知明訳」『眠りの航路』(白水社、二〇二一年)、吳明益「小栗山智訳」『複眼人』(KADOKAWA、二〇二二年)、吳明益「及川茜訳」『雨の島』(河出書房新社、二〇二二年)、甘耀明「白水紀子訳」『神秘列車』(白水社、二〇一五年)、甘耀明「白水紀子訳」『鬼殺し』(白水社、二〇一六年)、甘耀明「白水紀子訳」『冬將軍が来た夏』(白水社、二〇一八年)、甘耀明「白水紀子訳」『真の人間になる』(白水社、二〇二三年)、郭強生「西村正男訳」『惑郷の人』(あるむ、二〇一八年)、黄崇凱「明田川聡士訳」『冥王星より遠いところ』(書肆侃侃房、二〇二一年)、陳思宏「三須祐介訳」『亡霊の地』(早川書房、二〇一三年)、楊双子「三浦裕子訳」『台湾漫遊鉄道ふたり』(中央公論新社、二〇一三年)。ほかに近年では、伊格言「倉本知明訳」『グラウンド・ゼロ——台湾第四原発事故』(白水社、二〇一七年)、胡淑雯「三須祐介訳」『太陽の血は黒い』(あるむ、二〇一五年)、劉梓潔「明田川聡士訳」『愛しいあなた』(書肆侃侃房、二〇二二年)、林奕含「泉京鹿訳」

『房思琪の初恋の楽園』（白水社、二〇一九年）、林育徳『三浦裕子訳』『リングサイド』（小学館、二〇二一年）、陳又津『明田川聡士訳』『靈界通信』（あるむ、二〇二三年）などが刊行され、複数の作家による創作を収録した短編小説集では呉佩珍編訳『蝶のしるし』（作品社、二〇二二年）、呉佩珍編訳『バナナの木殺し』（作品社、二〇二二年）、呉佩珍編訳『プールサイド』（作品社、二〇二二年）などもある。

(32)

陳惠齡『郷土性・本土化・在地感——台湾新郷土小説書写風貌』（台北・万卷楼、二〇一〇年）、黄英哲『文学与翻译——黄春明在日本』、李瑞騰編『聽說読写黄春明——黄春明及其文学国际学術研討会論文集』（宜蘭・宜蘭県政府文化局、二〇一六年）八八一—一〇一頁、蘇頌斌『文学的時空批判——由「現此時先生」論黄春明的老人系列小説』、李瑞騰編『聽說読写黄春明——黄春明及其文学国际学術研討会論文集』（宜蘭・宜蘭県政府文化局、二〇一六年）三七二—四〇五頁、李有成『在冷戰的陰影下——黄春明与王禎和』、『台北大学中文學報』（第二六期、二〇一九年九月）一一—二四頁、施又文『從篇小説来看文学与社会——吳濁流「三八淚」与黄春明「蘋果的滋味」』、『東海大学図書館刊』（第四〇期、二〇一九年四月）四六一—六一頁、陳正芳『文化交流下的歴史印記——論陳映真和黄春明小説中的美国形象建構』、『台湾文学學報』（第二期、二〇二二年二月）一三七—一七〇頁、陳永松『一類関懷農業的不老童心——從「放生」到「護生」的体認』、李瑞騰編『聽說読写黄春明——黄春明及其文学国际学術研討会論文集』（宜蘭・宜蘭県政府文化局、二〇一六年）一九八—二一一頁。

(33)

西端彩『戦後台湾文学の日本における受容——黄春明「莎啞娜啦・再見」を例として』、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科編『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』（お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局、二〇一〇年）二〇六—二〇八頁、西端彩『黄春明「莎啞娜啦・再見」に描かれる記憶とアイデンティティの形成』、『お茶の水女子大学中国文学会報』（第四二巻、二〇二二年四月）四一—五五頁。ほかに関連した先行研究では、木下佳奈『黄春明が描いた女性たちが見出す「希望」——「看海的日子」と「小寡婦」から』、『現代中国』（第九二号、二〇一八年九月、一一九—一三〇頁）などが見られる。

(34)

本橋春光編訳『現代中国短編小説選』（栄光出版社、一九七五年）。なお、同書奥付によれば、編訳者の本橋春光は東京外国語学校中国語部（現在の東京外国語大学中国語専攻）を卒業後、台湾総督府台北経済専門学校（戦後は国立台湾大学に編入され、統廃合や再編を経て、同大学管理学院として現在に至る）助教を経て、同書の刊行当時は二松学舎大学教授であったという。原作は黄春明『児子的大玩偶』、『文学季刊』第六期（一九六八年二月）。なお、日本では「子供の大きな玩具」よりも「坊やの

(35)

人形」というタイトルのほうで知られている。

- (36) 管見の限りでは、本橋春光編訳『現代中国短篇小説選』は国立国会図書館や各地の公立図書館等に所蔵はなく、大学図書館では岡山大学の一枚だけに限られる。国立国会図書館法によって国会図書館への納本が義務化されたのが一九四八年であるため、一九七五年に刊行された同書は納本制度の対象外にあたる頒布目的の出版物ではなかった可能性が高い。従って、同書の日本国内での流通は極めて限定的であったと推測される。

- (37) 黄春明「田中宏、福田桂二訳」『さよなら・再見』（めこん、一九七九年）。

- (38) 原作は黄春明「莎哟娜啦・再見」『文季』第一期（一九七三年八月）、黄春明「蘋果的滋味」『中国時報』（一九七二年二月二八〜三一日）、黄春明「看海的日子」『文学季刊』第五期（一九六七年一月）。

- (39) 田中宏「あとがき」、黄春明、「田中宏、福田桂二訳」『さよなら・再見』（めこん、一九七九年）二一九頁。

- (40) 黄春明「莎哟娜啦・再見」（台北・遠景出版公司、一九七四年）。なお同書は新版として、黄春明「莎哟娜啦・再見」（台北・遠景出版公司、一九七七年）が刊行されている。筆者の手にある同書奥付によれば、一九八四年一〇月に第二十八刷が刊行された。

- (41) 黄春明「青番公的故事」『文学季刊』第三期（一九六七年四月）。

- (42) 星名宏修「西田勝編・訳「溺死した老猫——黄春明選集」」『植民地文化研究』（第二〇号、二〇二一年一〇月）一六九頁。なお、日本語訳「さよなら・再見」の版元であるめこんは一九七八年末に創業したばかりの出版社であり、同書は同社最初の刊行物になったという（『小出版社の挑戦』（4） 桑原農さん」『読売新聞』二〇〇八年九月一九日、一三頁）。

- (43) なお、一九八六年六月に刊行された第七刷では、奥付の次ページに同社が刊行した「アジアの現代文学」シリーズの書名が並ぶ。黄春明「さよなら・再見」に続き、カーシーナート・シン「わたしの戦線」（インド）、モフタル・ルピス「果てしなき道」（インドネシア）、エドガルド・M・レイエス「マニラ——光る爪」（フィリピン）、ローイ・リッテイロン「地下の大佐」（タイ）、苗秀「残夜行」（シンガポール）など東南アジアの各作家による作品が刊行された。

- (44) 田中宏、前掲「あとがき」二〇八頁。

- (45) 同右、二一八頁。

- (46) 同右、二一九頁。

- (47) なお、田中宏は別の雑誌記事で一九七六年に台湾を観光した日本人旅行客のうち九三・一%が男性であったとも指摘している（田中宏「台湾における新しい文化潮流——「郷土文学」の誕生」『朝日アジアレビュー』第九卷第三号、一九七八年九月、

- 九五頁)。田中は統計データの出典を明記していないが、この数値は法務省入国管理局の統計によるものだと思うられる(一九七六年日本人旅行者の男性率(法務省入管局調べ)「アジアと女性解放」第二号、一九七七年一月、一三頁)。
- (48) 「第六表 都道府県別・男女別 出国日本人(一九六四―二〇〇五)」『出入国管理統計』(二〇〇八年一月三十一日更新) <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250011&stat=000001012480&cycle=0&class1=000001012481&class2=000001020814&class3val=0> (二〇一四年七月二日アクセス)
- (49) たとえば、当時の新聞報道では次のようなものがある。「海外旅行ブームのかけに韓国女性が泣く「日本人観光」性の奴隷とドイ韓国キリスト教会婦人連が訴え」『読売新聞』(一九七三年一月三日、一二頁)、「台湾の「男性天国」日本の責任問う地元業者が非難の広告」『朝日新聞』(一九七七年一月三日、三頁)、「のさばる「買春観光」告発に対して「黙殺」」『朝日新聞』(一九七七年二月七日、四頁)、「セックス・ツアー」許さない 比政府が特別部隊」『読売新聞』(一九七九年九月二七日、二二頁)などである。
- (50) 前掲「台湾の「男性天国」日本の責任問う地元業者が非難の広告」。
- (51) たとえば、当時掲載された書評やインタビューには次のようなものがある。「日本男児の行状告発 生々しい侵略ぶり」『神戸新聞』(一九七八年五月二日、二頁)、「Taiwan Bestseller Stocks Japanese Satirizes Sex Tourism」『The Mainichi Daily News』(1978.6.16, p.12)、「黄春明著 ゃよなら・再見 日本人には苦い読後感」『朝日新聞』(一九七九年一月二八日、一一頁)、「白石省吾「フラッシュアジア現代文学への感慨」『読売新聞』(一九七九年二月一〇日、八頁)、松井やより「ひと日本人批判の小説を書いた台湾の作家 黄春明」『朝日新聞』(一九八一年一月二日、三頁)、松尾昌子「びーぶる・いんたーなしよなる 買春観光を小説にした黄春明さん 日本人への憤りより台湾人への悲しみが……」『朝日ジャーナル』第二四巻第七号、一九八二年二月、九四―九五頁)などである。
- (52) 前掲「黄春明著 さよなら・再見 日本人には苦い読後感」。
- (53) 松尾昌子、前掲、九四頁。
- (54) 黄春明「黄春明さんからのメッセージ」、『アジアと女性解放』(第八号、一九八〇年六月) 一三頁。
- (55) 針生一郎「微妙に異なる顔立ち」、日本アジア・アフリカ作家会議編『文化の支配と民衆の文化——第二回AALA文化会議報告集』(社会評論社、一九八五年) 一八六頁。
- (56) 「日本人エエコノミックアニマル論の自問自答を」『日本経済新聞』(一九八四年一月二日) 五頁。
- (57) 文大字編『東アジア長期経済統計別巻2——台湾』(勁草書房、二〇〇二年) 三〇九頁。

- (58) 同右、二八八―二九五頁。
- (59) 黄春明「田中宏訳」「日本語訳への序」、黄春明「田中宏、福田桂二訳」「さよなら・再見」(めこん、一九七九年)三―四頁。
- (60) 黄春明、前掲「さよなら・再見」八四頁。
- (61) 田中宏「台湾人補償問題と内外人平等」、『台湾人元日本兵の補償問題を考える』(第一四号、一九八三年九月)四―五頁。
- (62) 山口守編訳、前掲『鹿港からきた男』一二八頁。
- (63) 原作は黄春明「戦士、乾杯!」『中国時報』(一九八八年八月九―一〇日)。
- (64) 鄭義「藤井省三訳」「古井戸」(JICC出版局、一九九〇年)、莫言「藤井省三、長堀祐造訳」「中国の村から——莫言短篇集」(JICC出版局、一九九一年)、巴金「山口守訳」「リラの花散る頃——巴金短篇集」(JICC出版局、一九九一年)、茅盾「宮尾正樹、白水紀子、伊藤徳也訳」「藻を刈る男——茅盾短篇集」(JICC出版局、一九九一年)、張愛玲、楊絳「清水賢一郎、上田志津子、櫻庭ゆみ子訳」「浪漫都市物語——上海・香港・S.O.S」(JICC出版局、一九九一年)、北島、史鉄生「宮尾正樹ほか訳」「紙の上の月——中国の地下文学」(JICC出版局、一九九一年)、ザシタワ、色波「牧田英二訳」「風馬の耀き——新しいチベット文学」(JICC出版局、一九九一年)。
- (65) 黄春明「下村作次郎訳」「戦士、乾杯!」、山口守監修『バナナポート——台湾文学への招待』(JICC出版局、一九九一年)一〇三頁。
- (66) 野間信幸「解説」、山口守監修『バナナポート——台湾文学への招待』(JICC出版局、一九九一年)二三三頁。
- (67) 「占領と文学」編集委員会編「占領と文学」(オリジン出版センター、一九九三年)一―四頁。
- (68) 同右、一三八―一三九頁。
- (69) 西田勝、黄春明「黄春明わが文学を語る——「さよなら・再見」から「戦士よ、乾杯!」へ」、『植民地文化研究』(第二二号、二〇一三年七月)一九〇頁。
- (70) 「講演・講座／東京」、『朝日新聞』(一九九七年七月二四日)、河原功「学会・シンポジウム参加記——「近代日本と台湾」シンポジウム」『日本台湾学会ニュースレター』(第二号、一九九九年四月)二二―二六頁。
- (71) 西田勝、黄春明、前掲、一八九―二〇五頁。
- (72) 原作は黄春明「放生」『聯合報』(一九八七年九月一二―一五日)。
- (73) 黄春明「中村ふじゑ訳」「放生」、呉錦発ほか「中村ふじゑ、坂本志げ子訳」『鳥になった男——台湾現代小説選Ⅳ』(研文出版、一九九八年)四二頁。

- (74) 原作は黄春明「籬」『文学季刊』第九期（一九六九年七月）。黄春明「児子的大玩偶」については注35を参照されたい。
- (75) たとえば「台湾現代小説選」シリーズでは、前掲「終戦の賠償」で宋沢萊「若松正丈訳」「雀仔と貴仔の物語——打牛南村」が収録されている。
- (76) なお、黄春明作品の時期的な区分について、作風の変遷に視点をおいた場合、四期に分けることができる。第一期（一九六七年～一九七四年二月、「仙人掌雜誌」期）、第二期（一九七四年三月～一九八二年、「遠景出版」期）、第三期（一九八三年～一九八六年、台湾ニューシネマおよび「皇冠出版」期）、第四期（一九八六年三月～二〇〇九年、「聯合文学」期）である（梁竣瓊「黄春明研究評述」、李瑞騰、梁竣瓊編『台湾現当代作家研究資料彙編42——黄春明』（台南・国立台湾文学館、二〇一三年）九八一～一〇三頁）。
- (77) 「新しい台湾の文学」シリーズ、国書刊行会が出版「読売新聞」一九九九年三月一日）一〇頁、「現代台湾の文学を読んでみたい人に」『朝日新聞』（一九九九年三月二十八日）一四頁。
- (78) 山口守編『講座台湾文学』（国書刊行会、二〇〇三年）一六六一～一六九頁。
- (79) 山口守「郷土文学から台湾文学へ」、山口守編訳『鹿港からきた男』（国書刊行会、二〇〇一年）三四三～三四七頁。同右、三五四頁。
- (80) 黄春明「西田勝編訳」『溺死した老猫——黄春明選集』（法政大学出版社局、二〇二一年）。
- (81) 西田勝「編訳者あとがき」、黄春明「西田勝編訳」『溺死した老猫——黄春明選集』（法政大学出版社局、二〇二一年）二七一頁。詳細は「地球の一点から」（第一〇四号、一九九九年五月）を参照されたい。『地球の一点から』は、西田勝が法政大学に勤務していた頃に個人的に刊行していたニュースレターである。管見の限りでは、発行部数は不明であり、現在同誌の所蔵先は国立国会図書館と神奈川近代文学館に限られる。一九九九年に「城仔」下車」を翻訳掲載した時に、日本の読者に与えた影響は限定的であったものと思われる。
- (82) 西田勝、前掲「編訳者あとがき」二七二頁。
- (83) 同右、二七一頁。
- (84) 同書では既訳のある「坊やの人形」や「海を見つめる日」を「坊やの大きな人形」「海を訪ねる日」と題して再訳しているほか、児童劇の脚本である「小李子は大騙りではない」（一九九九、西田勝との対談録「龍眼の熟する季節」（一九九九）、「わが文学を語る」（二〇一三）なども収める。なお、原作は以下の通りである。春鈴「清道夫的孩子」「青年通訳」（第六三期、一九五六年二月）、黄春明「城仔」落車」『聯合報』（一九六二年三月二〇日）、黄春明「青番公的故事」『文学季刊』（第三

- 期、一九六七年四月)、黄春明「溺死一隻老猫」『文学季刊』(第四期、一九六七年七月)、黄春明「現此時先生」『聯合報』(一九八六年三月四日)、黄春明「等待一朵花的名宇」『聯合報』(一九八七年九月二日)、黄春明「死去活来」『聯合報』(一九九八年六月二六日)、黄春明「人工寿命同窓会」『聯合報』(二〇〇六年二月七〜八日)。
- (87) 温又柔「台湾庶民の哀歎 ユーモア交え」『朝日新聞』(二〇〇二年七月一七日)、および星名宏修「書評 西田勝編・訳『溺死した老猫——黄春明選集』」『植民地文化研究』(第二〇号、二〇〇二年一〇月) 一六九〜一七二頁。
- (88) 西田勝、前掲「編訳者あとがき」二七六頁。
- (89) 倉本知明「現代台湾文学における台湾語エクリチュールの日本語翻訳に関する比較検討」『日本台湾学会報』(第二五号、二〇〇三年七月) 四四〜四七頁。
- (90) 黄春明、前掲「溺死した老猫」二四八頁。
- (91) 倉本知明、前掲、四九頁。
- (92) 本稿で言及した書籍以外にも、加藤三由紀「黒い雪玉——日本との戦争を描く中国語圏作品集」(中国文庫、二〇〇二年)に黄春明「ある懐中時計」(西端彩訳)が収録されている。
- (93) 西田勝「黄春明の眼差し——社会的弱者・ユーモア・文明批判」、黄春明「西田勝編訳」『溺死した老猫——黄春明選集』(法政大学出版局、二〇〇二年) 二五九〜二六〇頁。
- (94) 詳細は宋惠萍「從庶民発声到社会關懷——黄春明小説中的人物形象」国立中興大学中国文学系修士論文(二〇一六年)、呂叔芹「黄春明小説郷土小人物形象書写之研究」国立高雄師範大学国文学系修士論文(二〇一九年)を参照されたい。
- (95) 福田恆存「私小説のために」、福田恆存「福田恆存全集Ⅰ」(文藝春秋、一九八七年一月) 四九〇〜五〇〇頁、および福田恆存「私小説の現実について」、福田恆存「福田恆存全集Ⅰ」(文藝春秋、一九八七年二月) 五六七〜五七七頁。
- (96) 西田勝「逆説としての戦後——福田恆存と私」、西田勝「社会としての自分」(オリジン出版センター、一九八五年) 二七〇頁。
- (97) 同右、二五八〜二九二頁。
- (98) 西田勝、黄春明、前掲、一九九頁。
- (99) 同右、一九九頁。
- (100) 董淑玲「死亡与完成——黄春明小説の老人群像」、尤麗雯編「黄春明的文学与芸術——第九届近现代中国語文國際學術研討會論文集」(台北・万卷楼、二〇〇二年) 一七七頁。
- (101) 李瑞騰、梁竣瓊編『台湾现当代作家研究資料彙編42——黄春明』(台南・国立台湾文学館、二〇一三年) 六四頁、および林木

(102)

材、劉安綺「專訪 黃春明談「芬芳宝島」」、『E』 電影欣賞』(第一八六期、二〇二二年五月) 一六一―二五頁。
張政傑「「郷土」与「現実」」、毛雅芬編『芬芳宝島』(台北・国家電影及視聽文化中心、二〇二二年) 二八頁、および張政傑「DISCOVER JAPAN」、毛雅芬編『芬芳宝島』(台北・国家電影及視聽文化中心、二〇二二年) 五〇頁。

(103)

西端彩「黃春明「毛毛有話」と台湾における児童文学創作」、『駒沢女子大学研究紀要』(第二二号、二〇一四年十二月) 二二二―二三五頁。

本研究はJSPS科研費「二一世紀台湾文学における「戦争記憶」をめぐる基礎的研究」(若手研究、22K13062)の助成を受けた。
なお、本稿は二〇二四年四月二三日に国立中興大学中国文学系で開催された国際学術シンポジウム「春萌花開——黃春明文学国際学術研討会」にて報告した研究論文を加筆修正し、日本語に訳したものである。

Translated Literature and Social Implications: The Context of Huang Chun-Ming's Translated Works in Japan

Aketagawa Satoshi

本文首先對台灣文學在日本的翻譯情況進行較系統性的整理與爬梳，介紹台灣文學日譯作品的出版情況與特徵。1979年由田中宏與福田桂二所翻譯的《さよなら・再見》（莎啞娜啦・再見）出版後，曾在日本社會與學界均廣泛地引起各方面的熱烈討論，這本譯作也成為戰後許多日本讀者首次接觸台灣文學的契機。尤其黃春明筆下所描繪的日本觀光買春團，更令日本學界中對二戰的反省與批判情緒發酵，敦促日本社會正視戰後亞洲經濟殖民的壓迫結構。本文試圖從台灣文學日譯作品的出版系譜中，重新探討黃春明作品在日本出版背後所蘊含的社會意涵。

